

# 武道必修化に向けた中学校の剣道授業に関する実践的研究

香川大学教育学部 4年 山神 剛

## I. 緒言

平成 24 年度から完全実施となる、中学校学習指導要領における武道必修化を控えて、剣道未経験者の教師も指導できる指導法が求められている。

本研究では、中学 1 年生を対象として、山神が提案する「対人性・伝統文化性・演武性」の観点を中心とした中学校における剣道授業の学習内容と指導法を構築するために、剣道授業の 1 単元を構成し、剣道未経験で教師歴 10 年の中学校保健体育男性教諭と、剣道 4 段で教育実習を経験した大学教育学部男子 4 年生を対象として授業実践を試み、その指導法の有効性について検討することを目的とした。

## II. 研究方法

1. **調査対象・授業形態**：高松市内の F 中学校 1 年生 3 クラスを対象とし、男女共修の授業形態で全 8 時間の授業とした。
2. **分析方法**：授業 VTR、形成的授業評価、及びアンケート調査
3. **学習内容**：授業における剣道学習のねらいを「竹刀を用いて相手と向き合い、剣道における攻防の楽しさを味わうことを通して、自他を尊ぶ心を養う」と定義した(山神、2009)。そして、剣道の本質的な楽しさを味わうために本研究では、「対人性」「伝統文化性」「演武性」の 3 つを剣道授業の柱とし、「大きな声を出す」「息を合わせる」「決められた竹刀の部位で打突部を正しく打突する」という学習キーワードを掲げることにした。授業のポイントは次の 7 項目である。①剣道衣・袴や剣道具は、お互いに協力してつけ合う②礼法など伝統的な行動の仕方の内容は厳選し、技の攻防を学ぶ学習場面の中で体感させながら学ば

せる。③対人的なゲームを体ほぐしとして積極的に取り入れる。④しかけ技は、引き技(引き胴・引き面)から始める。⑤応じ技は、面抜き胴から始める⑥グループ学習を取り入れて、グループ発表会を行う。⑦有効打突の判定基準：①部位の名称を大きな声で発し、確実にその部位を打っているかどうか(面は、竹刀の先革と中結いの中の真ん中部分が面金と面布団の境目にあたること。小手は、竹刀の先革が小手の筒の部分にあたること。胴は、竹刀の中結いが胴のカーブの部分にあたること。)、②打ったときに止まっていないかどうか(その場打ちにならないように)、③打った後、剣先を相手に向けて残心を示したかどうか(打った後の身構え、心構えを忘れないこと)をすべて満たしているかどうかで判定する。

## III. 結果と考察

### 1. 形成的授業評価

形成的授業評価から、1 年 1 組、2 組、3 組の総合評価を見てみると、2.7、2.75、2、8 と全てのクラスにおいて最終的には、5 段階評価の 4 から 5 であり、1 単元を通して高い評価を得ており、授業としては、良い成果があったと言える。特に、谷島(2007)ら指摘した学習従事時間の減少の問題は、専門用語の厳選化と、対人性を基軸としたグループ学習による生徒同士の教え合いにより最小限に抑えられた。これは、生徒の形成的授業評価の意欲・関心に関する高い数値や、授業後のアンケート・感想からも、理解できる。Y 学生の形成的授業評価の中で 7 時間目だけ急激に評価が下がっていたが、これは、指示や授業の流れがうまくいかず、生徒の学習従事時間の確保や、課題の

明確化が出来ていない結果である。この数値の減少は、Y学生の指導力不足であり、指導内容とは関係ない数値の減少と考えられる。

## 2. 自己評価チェックシート

- (1) 伝統文化性の観点の中の礼法(禮法)では、授業を進めていくにつれ生徒の意識も高まっていた
- (2) 技能面の理解度は、剣道の技術面のポイントの明確化と武道の専門用語の厳選化をはかったことにより、高い傾向を示した。
- (3) ペア学習やグループ学習の導入により生徒同士の協力が常にみられたことからグループ学習や演武形式の発表会の有効性が示唆されている。
- (3) 技術の習得に沿って生徒自身が礼法の本質を感じながら礼法を身に付けていた。

## 3. 剣道未経験教師と学生の振り返りから

剣道未経験の先生が剣道授業を終えて、来年度も剣道授業を行う意思を示していることは、剣道未経験の教師も今回提案した剣道授業の指導法に高い興味・関心を持った結果であると考えられる。

大学生として実際に剣道授業の単元を行った結果、授業の指導経験の少ない立場ではあったが、山神が提案した剣道授業のポイントに取り組むことによって、対人性・伝統文化性・演武性に焦点化した剣道授業の有効性を少なからず学ぶことができた。

## IV. まとめ

本研究は、中学校1年生を対象にして、誰でも指導できる剣道の学習指導法の構築を目指して、剣道未経験の男性教諭と剣道有段者の教育学部4年男子学生に、「対人性・伝統文化性・演武性」に焦点化した1単元8時間の授業実践を試み、以下の結論を得た。

- (1) 対人性を重視した剣道授業として、握手の間合い、剣道の体ほぐし、道衣・袴や剣道具の着装的協力、ペアを中心とした練習法と発

表形式の演武評価の学習内容の有効性が示唆された。

- (2) 技能の学習内容として、しかけ技(引き胴)から始める提案は、近い間合いで相手を注視し、相手との距離の間合いやタイミングを習得する上で意義あり、結果として、相手を思いやる気持ちにつながる可能性があると思われる。
- (3) 竹刀の部位と打突部の有効打突に関する指示の明確化や武道用語の厳正化が生徒にわかりやすいという高い評価を得ていた。
- (4) 礼法(禮法)や伝統的な行動の仕方ばかりを最初から指導、強調せず、技能の学習段階に応じて体感させながら説明することによって、堅苦しさではなく伝統文化性の深さに触れることができると思われた。

今回提案の「対人性・伝統文化性・演武性」に焦点化した剣道授業において、生徒は、友達と息を合わせることや大きな声で演武に集中し、礼法(禮法)の意味を感じながらグループでの発表会に達成感を感じていた。また、剣道未経験の中学校男性体育教師もこの学習指導法に手ごたえを感じ、来年度も剣道授業を行いたいと言われた。私は、今回の卒論で武道必修化にむけた新たな剣道授業の提案授業を行う機会を得て、改めて武道の魅力とその教育的価値に気づくことができた。

## V. 引用・参考文献

- 鈴木幸男：「生徒一人一人が意欲的に運動の仕方を学ぶことのできる学習実践の在り方—武道学習(剣道)の実践を通して—」筑波大学修士論文. 2009
- 谷島靖弘・岡嶋恒：「中学校剣道授業における授業分析～4大教師行動と形成的授業評価から～」北海道教育大学釧路校研究紀要、第38号、145-151頁、2006.
- 山神眞一：「新しい剣道の授業づくりをめざして」体育科教育12月号、30-33頁. 大修館. 2009

